

図式的投影法を用いた母親の家族認識 (6)

—現在の家族と理想の家族—

Mother's Perception of Her Birth Family Using Schematic Projective Techniques (6)

— Figure of the Current Family and Figure of the Ideal Family for Mother —

小林 麻子*・会沢 信彦**

Asako KOBAYASHI, Nobuhiko AIZAWA

要旨：女性が家族体験を通して母親になっていく過程を主観的に捉えるため、3～5歳の子どもの持つ母親8人を対象に、母親の幼少期から現在まで人生のステージごとに場面を設定し、図式的投影法を使って面接調査を行った。本報では、現在の家族と理想の家族の比較を行い、母親が家族の中で感じている問題や母親が望む家族関係について社会的ネットワークの概念を使って分析した。夫婦関係については図式の駒の位置分析を行った。育児に追われる現在、家族の距離が近いと感じている母親は、子どもが成長し各々が自立した状態を理想の家族関係としている。夫が父親の役割を果たしていないと感じている母親は、子どもが父親を尊敬する家族関係を望んでいる。母子関係に問題があると感じている母親は、家族ネットワークの再編がうまく行かず母親としてのアイデンティティの危機にある。母親は夫婦や家族が一つになった家族関係を望んでいる。夫婦関係では、理想の家族において大部分の母親が夫婦の駒を同じ高さで隣合わせに並べ、子どもの駒を夫婦の駒から離したことから、母親が対等な夫婦関係、家族の中で夫婦関係を重視することを望んでいることが推測される。専業主婦の母親は、対等な夫婦関係よりも、一家の柱となる父親であることを重視していた。

キーワード：図式的投影法、社会的ネットワーク、母親が望む家族関係、母親が望む夫婦関係

1. 問題と目的

結婚生活の満足度について、夫が満足、妻が不満足という傾向は、調査方法や対象の違いに関わらず多くの研究でほぼ一致する（柏木，2006）。厚生労働省の第14回出生動向基本調査によ

* こばやし あさこ 文教大学生生活科学研究所客員研究員

** あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部

ると、恋愛結婚と見合い結婚の構成は、恋愛結婚 88.0%、見合い結婚 5.3%（2004 年～2009 年）となっている。恋愛結婚は共感的な愛情をもつ対等なもの同士の結婚であり、対等性はきわめて重要な要件となる（柏木，2006）。しかし、社会的・文化的に作りあげられた性別すなわちジェンダーは、特に家庭の中で明瞭に現れている（石川，1996）。家庭内の役割分担状況をみると（総理府，2004）、掃除・洗濯・炊事のいずれにおいても、有業無業、就業状況に関わらず、7 割以上の家庭で女性が家事を担当しており、夫婦共通の生活空間では、伝統的性役割観がまだ支配的である（諸井，2006）。伝統的性役割観は、男女平等の教育を受け、対等な夫婦が望ましいと考える妻にとって、不公平感を抱かせる要因となり、心理的に大きな負担となる（柏木，2006；諸井，2006）。しかしながら、夫婦は家族の中で夫と妻という役割だけでなく父と母という役割も担っている。対等な夫婦関係を望む妻であっても、父親としての夫には一家の大黒柱としての役割を求めたり、父親が特別な存在であると子どもが感じるようなお膳立てを意識的、あるいは無意識的にしていたりする場合もある。夫婦関係と親子関係は互いに影響しあい、夫婦のみの二者関係とは違って家族関係は飛躍的に複雑化する（福川，1996）。

そこで本研究では、母親が現在の家族関係の中で感じている問題や母親が求める家族関係について、社会的ネットワークの概念を用いて分析する。社会生活を営む個人が持っている様々な社会関係は、個人を中心として網の目のように拡大しており、この社会関係の網の目を社会的ネットワークと言う。目黒（2007）は、ネットワーク論に家族の発達課題という視点を取り入れることにより、家族が充たすべき欲求（ニーズ）を持ち（課題）、それは時間の経過にともなって変化する（発達）というダイナミックな家族のネットワーク分析が可能になると述べる。

調査には図式的投影法を使用する。図式的投影法は、体験と意識といった主観的世界を含む人間全体にアプローチしようと水島により考案された、概念領域からイメージ領域を含んだ投影法である（水島，1979）。図式は現実世界の論理的概念的理解と解釈を含み、同時にそのように理解された世界に対する感情、被験者自身の様々な欲求を含む（上杉，1984）。本研究では図式的投影法を用いた面接で母親が語った内容を質的（解釈的）に分析するとともに、作成された図式について駒の位置による分析を行う。家族構成員同士の関係を家族全体の中で捉えることができる図式の特徴を生かし、現在の家族関係と母親が理想とする家族関係、さらに母親の幼少時における両親の関係を比較しながら、母親が望ましいと考える家族関係、夫婦関係について考察する。

2. 方 法

（1）調査協力者

東京の私立保育園の父母会と東京近郊の育児グループに依頼。応じてくれた 3 歳～5 歳の子どもをもつ母親 8 人を対象にした。調査協力者一覧を表 1 に示す。

（2）調査期間および実施場所

実施期間は 2000 年 9 月から 11 月にかけて。実施場所は調査協力者の都合に合わせたため、調査協力者の自宅、調査者の自宅、本大学院の実習室となった。

（3）調査方法

図式的投影法を用いて個別面接調査を行った。面接の所要時間は一人当たり平均およそ 4 時間であった。

表 1 母親のプロフィール

	年齢	原家族	職業 結婚前／現在	現在の家族
A	30 代前	父・母・妹 (3 歳下)	教員	夫・長男 (7 歳)・長女 (5 歳)・次男 (0 歳)・姑
B	30 代前	父・母・弟 (3 歳下)	看護師／教員	夫・長男 (4 歳)・次男 (2 歳)
C	30 代中	父・母・弟 (4 歳下)	会社員／なし	夫・長女 (3 歳)
D	30 代中	父・母・妹 (双子)	会社員／会社員	夫・長女 (4 歳)
E	30 代前	父・母・妹 (3 歳下) 弟 (8 歳下)	会社員／なし	夫・長男 (3 歳)・長女 (3 歳) * 双子
F	20 代後	父・母・長兄 (4 歳上) 次兄 (2 歳上)・祖父・祖母	職歴なし	父・母・次兄・長女 (3 歳)
G	30 代後	父・母・弟 (3 歳下)	会社員	夫・長女 (3 歳)
H	20 代後	父・母・妹 (3 歳下)	会社員	夫・長女 (4 歳)・長男 (2 歳)

i) 家族関係単純図式

直径 2cm の円形の駒を家族の人数分用意し、家族の構成員の名前を記入する。B 5 判の白紙縦に直径 10cm の円枠 (家族の枠) を作り、家族の駒をそれぞれ自由に移動させながら「ピッタリ」と思える位置に置く。

ii) カード式自己像単純図式 (自己像単純図式に感情カードを併用した複合図式)

B 5 判の白紙縦に上部が開いた直径 10cm の円枠を作り、円枠の上部 2cm 上に対象カードを置く。直径 2cm の円形の駒を自己の核とし、対象に対して「ピッタリ」と思える位置に置く。さらに感情語 (Pultchik, R. の感情 8 語を漢字 1 文字に置き換えたもの「喜、悲、望、恐、愛、嫌、怒、驚」を用いる) が記された 2cm 四方の感情カードを、その対象に対して配置する。

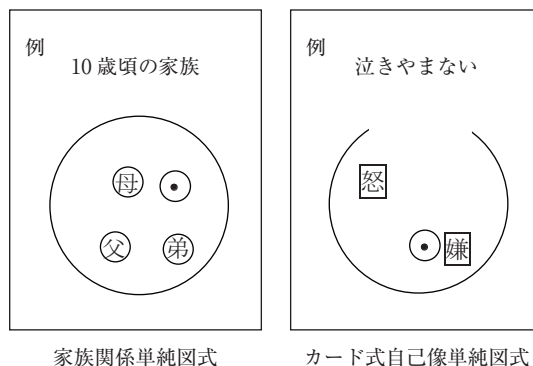


図 1 調査で使用した図式

(4) 手続き

図式的投影法では、人生のステージごとに質問項目を設定し (表 2)、その項目を対象カードとして家族関係単純図式、あるいはカード式自己像単純図式を作成してもらった (図 1)。実験者は被験者に「(対象に対して) 駒を自由に動かして、自分がピッタリすると思えたら、そこにのりづけして下さい。」と指示する。図式作成後、母親に自分の作った図式を説明してもらいながら、当時の家族の様子を語ってもらう。質問は幼少期から現在まで時系列に提示する。面接中の会話は被験者の許可を得て録音し逐語録を作成した。本報では、ステージ 1 の「子どもと同じ

年頃の家族」とステージ6の「現在の家族」「理想の家族」（いずれも家族関係単純図式）を対象にする。

表2 質問項目一覧

ステージ	質問項目	ステージ	質問項目
1 子どもから 青年期	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと同じ年頃の家族 ・10歳頃の家族 ・18歳頃の家族 ・18歳頃 母 ・18歳頃 父 ・青年期の友人 	4 幼児期 (2歳頃～5歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか寝てくれない ・ぐずぐずする ・飛び跳ねたり叫んだり暴れたり ・私の言った通りやってくれない ・かんしゃく ・おもらし
2 結婚から出産	<ul style="list-style-type: none"> ・新婚時代 ・妊娠を知った時 ・妊娠後期 ・子どもが産まれた時 	5 第二子以降	<ul style="list-style-type: none"> ・第二子以降の妊娠を知った時 ・第二子以降の出産後
3 乳児期 (0歳～1歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> ・初めて目が合って微笑んだ時 ・どうしても泣きやまない ・私の作った離乳食を食べてくれない ・後追い／抱っこ 	6 現在	<ul style="list-style-type: none"> ・夫 ・子ども（ひとりひとり） ・現在の家族 ・理想の家族

3. 結果

母親の作成した「現在の家族」「理想の家族」「子どもと同じ年頃の家族」の家族関係単純図式を図2に、図式の説明の要約を表3に示した。

(1) 現在の家族と理想の家族

i) 現在の家族

現在は子どもがまだ小さいこともあり、家族がくっついている状態や子ども中心の状態を表現したのはA、C、F、Gであった（A：現在は子どもが小さいので家族がくっついている、G：今はまだ子どもが小さいから、協力していかなければならないからこんなにくっついている、C：今は子ども中心）。離婚後実家で生活するFは、育児で両親の支援を受けていることから、両親との距離を近く感じている。

現在の家族関係の問題を表現したのは、B、D、E、Hであった。BとHは家族が分かれていると感じている（B：私と次男、夫と長男という組み合わせになる、H：夫と娘、私と息子という異性同士の組み合わせになって家族が分れている）。Eは家族との関わりに夫が無関心だと感じている。Dは自分を支持してくれない夫に距離を感じている。

ii) 理想の家族

「現在の家族」と比べて家族の駒の間隔が広がったのはA、C、E、F、G、H、夫婦がくっついたのはDとH、家族が凝集したのはB、夫が家族の中心になったのはCであった。

子どもが成長した時の家族の関係を表現したのはA、E、Gで、夫も含めて家族間で距離を取るというものであった（A：将来的にはお義母さんを中心に家族がつながっていくのいいのかもしれない、E：子ども達も少しずつ離れていて、自立しなければいけない、G：もうちょっと個人個人が独立すれば良い）。

現在の家族の問題が解決した状態を表現しているのは、B、C、D、F、Hであった。Bは長男との溝が修復され家族がもっと気軽に付き合えるようになる。Cは子ども中心から夫中心（父親中心）の家族にする。Dは仲の良い夫婦の間に子どもがいる。Hは夫婦と子どもの間を少しあける。Fは支援を受けている家族から心理的に自立する。

(2) 母親が幼少時の両親の夫婦関係との比較

母親が作成した家族関係単純図式「子どもと同じ年頃の家族」「現在の家族」「理想の家族」から、父母間および夫婦間の駒の距離や位置関係を分析し、その結果を表4に示した。

表4-①より「子どもと同じ年頃の家族」では、父母の駒に上下がなく隣同士に並んで接触しているのはDのみであった。駒の上下では、母駒が父駒より上になっているのはHのみで、D、H以外は全て父駒が母駒の上になっていた。父母の駒が非常に近いのはAとF、近いのはE、中間はB、離れているのはC、G、Hであった。父母の駒の間に子どもがいるのはCとHであった。

表4-②より「現在の家族」では、夫婦の駒に上下がなく隣同士に並んで接触しているのはBのみであった。夫婦の駒に上下が無いのはB、C、D、夫が上になっているのはE、H、母親が上になっているのはA、Gであった。夫婦の駒が接触、近接しているのはA、B、G、H、中間はD、E、離れているのはCであった。夫婦の駒の間に子どもがいるのはC、Dであった。

表4-③より「理想の家族」では、夫の駒を上にしてしているのはEのみで、他は全て夫婦の上下なく隣同士で並んでいた。夫婦の駒が接触しているのはB、D、H、近いのはE、中間はA、C、Gであった。夫婦の駒の間に子どもを入れた母親はいなかった。

「子どもと同じ年頃の家族」との比較では、Cが現在の家族と、Dが理想の家族と近い形になっている。

4. 考 察

(1) 家族の問題と理想の家族関係

母親が作成した2つの図式「現在の家族」「理想の家族」は、幼児期の子どもを抱える母親が感じている家族の問題を様々な角度から浮かび上がらせている。A、E、F、G、Hは、時間という視点を導入して「理想の家族」を将来の家族の姿と捉えている。彼らは期待される家族行動が家族周期の段階によって異なることを理解している。子どもが小さい現時点での生活は子ども中心であり、限られた時間の中で多くの家事、育児をこなしていくために夫婦、家族は多くの部分で関わり合っている。A、F、Gは現在の状況を家族の距離が近いと感じている。将来的には、個々の家族が自分らしく生きていくために家族間の距離が必要だと考えている。Eも将来については同様の考えである。Hは夫婦と子どもの間の距離が必要だと考えている。

CとDは父親としての役割を果たせない夫に問題があると感じている。家族内の人間関係に影響を与える一つの要素として「役割」がある。家族成員は個性とは別の次元で、個人の家族内に占める座位に付随する行動様式が期待されており、これが夫婦関係や親子関係を規定する。そして、例えば「新婚期」「育児期」「向老期」「老年期」といった家族の周期的変化は役割関係の変化を基礎としており、役割関係の変化の結果、家族欲求（ニーズ）が変化する（目黒, 2007）。Cは結婚によって夫の役割が「息子から夫」に変化しているにも関わらず、結婚後も家族に干渉してくる夫の両親に何も言えないことに不満を持っている。Cは家族の中心が夫ではなく、子ども

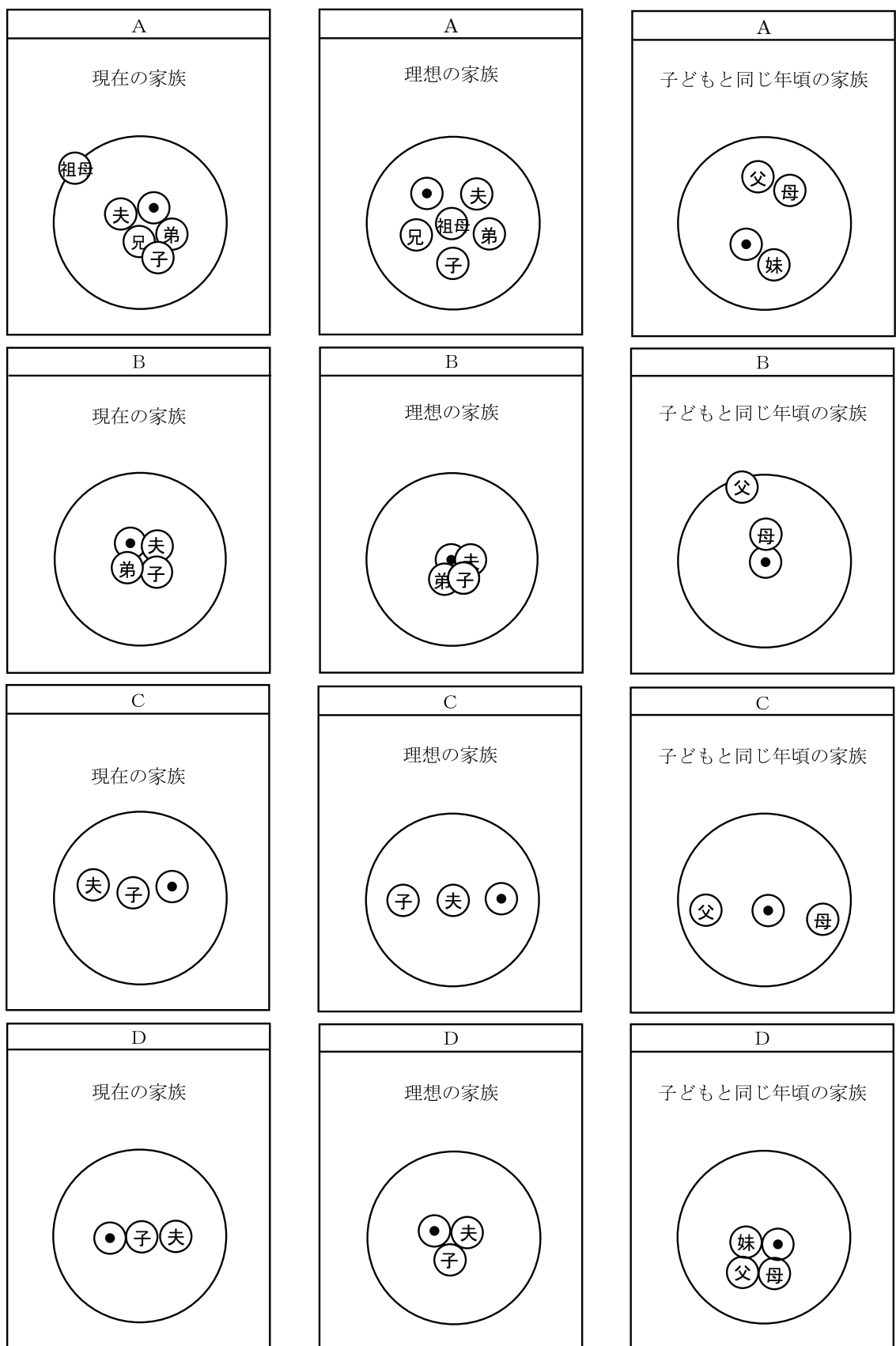


図 2-1 母親の作成した家族に対する図式

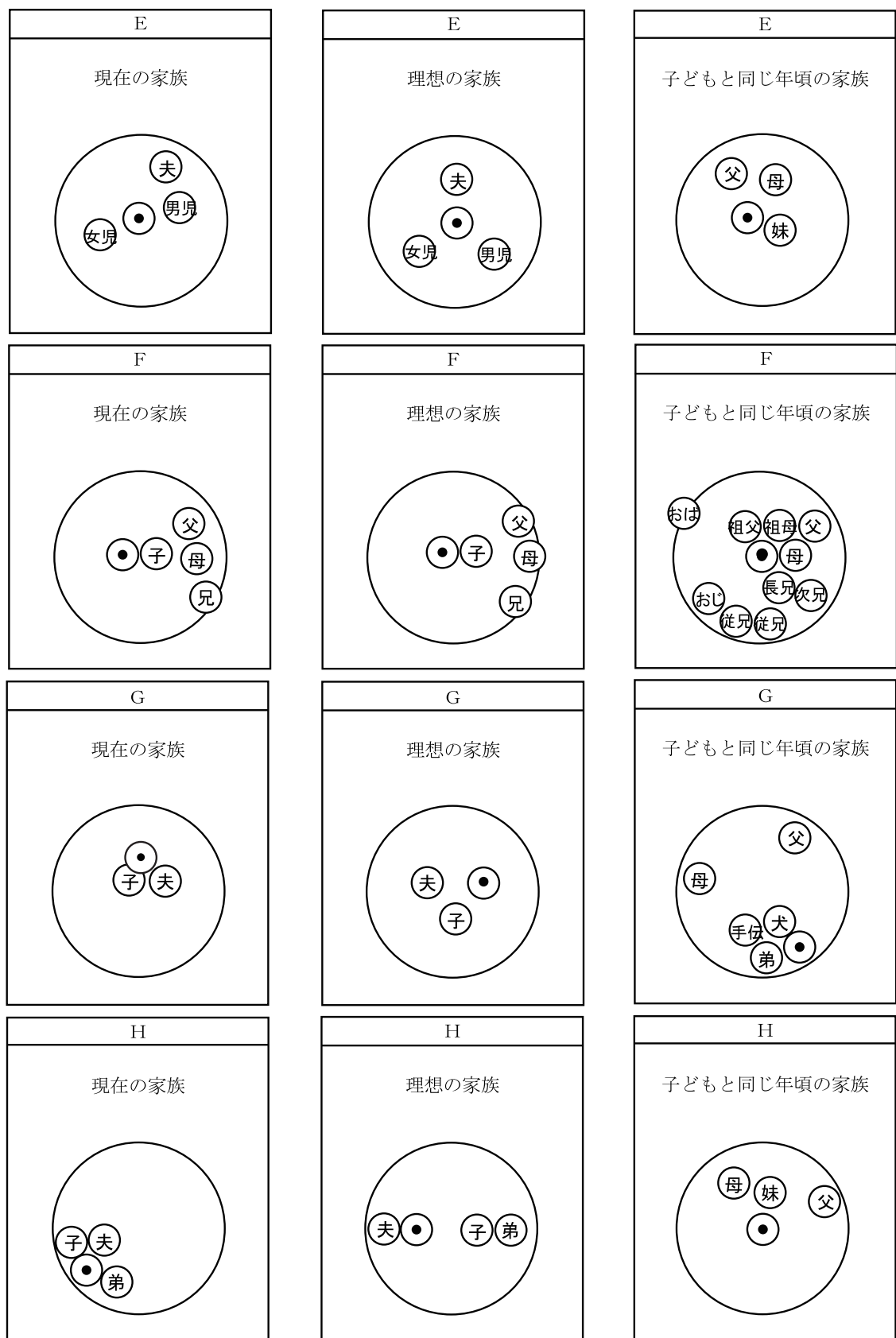


図 2-2 母親の作成した家族に対する図式

や自分になっていると感じており、夫が「夫としての役割」「父親としての役割」を果たし、一家の中心になることを望んでいる。Eは家族に無関心な夫に不満を持っている。子どもが産まれたことで夫婦関係に親子関係が加わり、夫には父親としての役割が期待されているが、夫は自分の趣味に時間を費やし、家事も育児も自らやろうとしない。Eは夫が父親として子どもに尊敬される存在になることを望んでいる。

B、D、Hは現在、子どもとの関係に問題があると感じている。Dは自己主張の強い子どもに対応しきれない。B、Hは第二子が誕生したことで子どもの要求に応えられない。子どもの怒りはB、D、Hに向けられ、彼らは子どもの反抗的な態度に手を焼くが、その一方で夫が彼らに代わって子どもの要求を満たしていることに複雑な思いを抱いている。子どもが自分より夫になっていることは彼らの母親としてのプライドを傷つける。家族ネットワークの再編は、家族の役割内容に変化が生じた時、それにともなう新しい家族ニーズに対応する資源（リソース）確保のため行われるが、その時点でネットワークがスムーズに再編されないと、アイデンティティの危機になる恐れがある（目黒，2007）。B、Hは、第二子の誕生によって母親の役割内容に変化が生じ、その結果、家族のニーズも変化しているが、それに対応する家族ネットワークの再編がうまくいかず、母親としてのアイデンティティの危機にさらされている。Dは子どもが成長するにしたがって子どものニーズに対応できない。しかし、夫にサポートを求めても得られず、ネットワークを形成できない。DもB、Hと同様に母親としてアイデンティティの危機にある。家族が一つなることを望むB、夫婦が一つになることを望むDとHは、家族ネットワークの再編を求めていると捉えることができる。

(2) 望ましい夫婦関係

「子どもと同じ年頃の家族」の父母は、DとHを除いて全て父駒が上になっていた。父に対して仕事が忙しい、家にいなかったと感じている母親は多い（B、C、F、G、H）。父は外で働き、母は専業主婦という家庭の中で、父の記憶は少ないが父の権威を感じている母親が多いのは（A：お父さんが絶対的にいて E：家の中で一番偉い人）、家庭の中で父親が大黒柱として立てられていた状況があったと想像できる。ところが「現在の家族」の夫婦では、夫の駒が上になっているのはEとHのみで、A、Gは母親の駒が上、B、C、Dは同じ高さになっている。幼少時の記憶にある両親とは異なる夫婦の関係が図式に投影されている。「理想の家族」では、その傾向がさらにはっきりと表れる。Eを除く全ての母親が夫婦の駒を同じ高さで隣合わせに並べた。ここには夫婦は対等という母親の意識が投影されていると考えられる。また、夫婦の駒の間に子どもの駒が置かれることはなく、現在の家族と比べると、B、Dを除いて子どもの駒は夫婦の駒から離れている。夫婦の駒が接触しているのはB、D、Hのみであるが、他の母親も適度な距離を取ながら夫婦が並んでいることから、母親が夫婦関係を重視していることが予想できる。

しかし、理想の家族においてCとEの図式には他の母親と異なる点があった。Cは夫の駒が中心にあり、Eは夫の駒が家族の駒の上に来ている。専業主婦のCとEが、対等な夫婦関係より一家の中心としての父親、父親の権威を重視しているところは、仕事を持つ母親と異なっている。










(3) まとめ

本報では、母親が作成した家族関係単純図式「現在の家族」「理想の家族」から、母親が理想とする家族関係および夫婦関係について考察を行った。理想の家族関係では、家族一人一人の自立を重視するもの、夫婦や家族の繋がりを重視するもの、家族の役割を重視するものがあり、そ

表3 「現在の家族」「理想の家族」「子どもと同じ年頃の家族」に対する図式の説明（家族関係単純図式）

		内 容
A	現在の家族	（夫の母親と二世帯住宅）現在は子どもが小さいので、家族がくっついている。
	理想の家族	将来的には、お義母さんを中心に家族がつながっているのがいいのかもしれない。
	子どもと同じ年頃の家族	父が絶対的にいて、父をたてる母がいて、私の後に妹がくっついてきて。居心地は良かったと思う。
B	現在の家族	私と次男、夫と長男という組み合わせになる。テーブルの座り方もそうだし。今は山を越えたという感じ。
	理想の家族	兄弟がもっと仲良くなって、長男も私とくっついて。みんながもっとくっつくのが理想。長男とも楽に付き合えるように、長男とどうやって付き合おうなんて考えずに。
	子どもと同じ年頃の家族	父は仕事が忙しくて帰りが遅かったと聞いている。母は専業主婦。父は子煩悩だったらしいが、外の世界と関わりがあるのは父だけで母は家の中心。中心といっても子どもの私になる。
C	現在の家族	今は子どもを中心、子どもか自分が中心になってしまう。
	理想の家族	理想は昔の家族みたいに、お父さんを中心に出来たらいい。子どもの成長にはこっちの方がいいのだろう。
	子どもと同じ年頃の家族	その頃はまだ両親を意識するというのはなかったと思う。和気あいあいとやっていたような。あまり父が家にいなかった記憶がある。
D	現在の家族	私と夫の間に子どもがいる。距離はくっつけた。子どもが間にいるから私と夫はくっついている状態。
	理想の家族	理想は夫との距離が近い方がいい。夫婦だから仲良くできたらいい。そういう夫婦の間に子どもがいる。
	子どもと同じ年頃の家族	父と母と一緒に仲良くくっついて、私と双子の妹と一緒に仲良くいる。両親はそばにいて見ていてくれる。
E	現在の家族	息子は夫と私の間、娘は私。二人でこの辺を行ったり来たり遊んでいるイメージ。夫はもう少し子どもに近づいて欲しいが、友達のようになってバカにされても良くないので、あまり関わらない方が正解かなとも思う。
	理想の家族	ある程度大きくなってからのこと。夫は子ども達が尊敬できる人になって欲しい。粗大ごみではなく。私がいて、子ども達も少しずつ離れていて、自立しなければいけない。だけど私のことは忘れないでという意味でそばに置いて。
	子どもと同じ年頃の家族	父と母がいて自分がいて、記憶にはないけど産まれたばかりの妹がお友達のように自分の下にひっついていて。ピクニックのようなことが両親は好きで行った記憶がある。楽しかった。
F	現在の家族	子どもが幼稚園に行き始めて我慢したり思いやる部分があると、私が一生守っていく訳ではないと気づく。私と子どもは真ん中、両親は子どもを介して入ってくる。兄は将来結婚するので枠の上。子どもを育てる上で三人に支えられている。
	理想の家族	現在は理想の家族に近い。理想的に言えば、もうちょっと遠い方がいいかなと思う。自分の将来を考えると、もう少し心理的に離れていた方が上手く行かなと思う。
	子どもと同じ年頃の家族	一番近いのは母と祖母、祖父。父は仕事が忙しくてほとんど家にいなかった。下の兄とはけんかばかりで怖いイメージ。上の兄がよくかわいがってくれた。隣に住んでいたおじと従兄、みんなに愛してもらったという本当に幸せな子ども時代だった。
G	現在の家族	ちょっと必要以上にくっついている。夫も近い。今は子どもがまだ小さいから、協力していかなければならないからこんなにくっついている。
	理想の家族	もうちょっと個人個人が独立すれば良い。子どもが人格をちゃんと持ったら、もう少し離しておいた方が依存型にならずに良い。（離すというのは）もう少し自分を飾ってもいいかな。大変な時に大変と言わないとか、相手に失礼な言葉は口に出さないとか。今は時間とか物事を短縮するためにダイレクトに言っている。
	子どもと同じ年頃の家族	単身赴任の父は自分の世界を持っていて、母も自分の世界を持っていて友人もいて。弟と私と犬は特に大きな帰属意識はなかったので家の中でゴロゴロいる。それをお手伝いさんが面倒見て。お手伝いさんが母と直列にラインになって母代わり。犬と弟と私はひとまとまり。でも小さい分弟と犬は母に近い所にいる。
H	現在の家族	夫と娘、私と息子という異性同士との組み合わせになって家族が分れている。寝る時もそう。何でもいつもパパと寝るのか娘に尋ねたらママには「君いるじゃない」と言われた。娘なりに寂しい思いをしていると思うが、甘えてくる息子の方が可愛い。
	理想の家族	将来は、夫婦ときょうだいうまくみんなつながってくれたらいい。やはり、夫と私が一つになって、姉弟との間をちょっとあけたい。あけなければいけないかなと思う。
	子どもと同じ年頃の家族	父は仕事一筋でほとんど遊んだ記憶がない。私はおとなしい子で妹は活発。母は妹に気を取られて私はひとりで遊んでいることが多かった。でも父はその輪に入っていない。

表4 母親が作成した図式の駒の位置分析

	父母の駒				夫婦の駒							
	①子どもと同じ年頃				②現在の家族				③理想の家族			
	並ぶ	上下	距離	夫・  ・婦	並ぶ	上下	距離	夫・  ・婦	並ぶ	上下	距離	夫・  ・婦
A	○	父 母	近接	—	○	 夫	接触	—	○	—	中	—
B	—	父 母	中	—	○	—	重なる	—	○	—	重なる	—
C	—	父 母	遠	○	—	—	遠	○	○	—	中	—
D	○	—	接触	—	—	—	中	○	○	—	接触	—
E	○	父 母	近	—	—	夫 	中	—	—	夫 	近	—
F	—	父 母	近接	—								
G	—	父 母	遠	—								
H	—	母 父	遠	○	—	夫 	近接	—	○	—	接触	—

の背景にはそれぞれの母親が現在の家族に感じている問題が反映されていた。概ね家族をコントロール出来ていると感じている母親は、将来に意識を向け、子どもが成長した時の母親の人生も視野に入れることが出来ていた。子どもとの関係に問題が生じ、家族をコントロール出来ていると感じられない母親は、夫婦関係、家族関係を改善することが問題の解決につながると考えていた。父親の役割を重視する専業主婦のCとEは、夫婦の駒の位置分析において他の母親とは異なり、夫の駒が家族の上あるいは中心になっていた。CとEは子どもの成長にとってそれが良いと考えている。性別役割分業、家父長的な家族関係を子どもにとって理想とするCとEは、仕事を持つ他の母親とは異なる家族観を持っていると言える。

今回の図式的投影法を使った調査では、母親が現在家族の中で感じている問題が「現在の家族」に投影され、問題の解決策あるいは解決した姿が「理想の家族」で表現されていた。母親がそれを意識していたかどうかは不明だが、面接終了後、多くの母親は「いろいろなことに気づかされて面白かった」と語っている。水島（1999）は図式的投影法が全体的自己表現・洞察の媒介になると述べているが、本調査でも、図式は母親の洞察に大きく関与していると考ええる。

引用文献

- 福川須美 1996 家族と子ども（山根恒男・玉井美知子・石川雅信 編集 わかりやすい家族関係学 21世紀の家族を考える）ミネルヴァ書房, 94-130.
- 石川雅信 1996 男女関係・夫婦関係の変化（山根恒男・玉井美知子・石川雅信 編集 わかりやすい家族関係学 21世紀の家族を考える）ミネルヴァ書房, 38-56.
- 柏木恵子 2006 夫婦関係・カップル関係の変化とその心理 実証研究から（日本家族心理学会 編集 夫婦・

- カップル関係―「新しい家族のかたち」を考える）金子書房, 2-23.
- 国立社会保障・人口問題研究所（編）2010 第14回出生動向基本調査
- 内閣府男女共同参画局 2004 男女共同参画白書 平成16年版 国立印刷局
- 目黒依子 2007 家族社会学のパラダイム 勁草書房
- 水島恵一 1979 「体験と意識」研究の方法論 体験と意識に関する総合研究第1集, 1-8.
- 水島恵一 1999 イメージ心理学 大日本図書
- 諸井克英 2006 夫婦関係学への誘い―揺れ動く夫婦関係― ナカニシヤ出版
- 上杉喬 1984 図式投影法とイメージ（水島恵一・小川捷之 編 イメージの臨床心理学）誠信書房, 190-196.